

「認知症ケア公開研究会」開催報告

吉村夕里

本年度で3回目となる認知症ケア公開研究会を2013年12月1日(日)午後1時～5時半に京都文教大学の指月ホールで、認知症ケア関係者、学生、教職員らの参加の下で開催した。今年度は教育福祉心理学科の連続講座の一回目と

して、また、京都文教大学のニュートウン研究会との共催という位置づけで実施し、参加を呼び掛けた認知症ケア関係者についても本学近辺の事業所や医療機関を中心とした。さらに、「公開事例検討会」という名称で、具体的な事例を

<認知症ケア公開研究会>
 京都文教大学臨床心理学部
 教育福祉心理学科 連続講座 NO.1

教育福祉心理学科 & 京都文教大学ニュートウン研究会共催
 2013年12月1日(日) 午後1時～5時半
 京都文教大学 指月ホール(宇治市福島町千足80)

【第一部 午後1～2時】
 認知症の施設ケアと地域ケア(講演会)
 報告: 総合ケアセンターサンビレッジの取組から
 総合ケアセンターサンビレッジの取組をご紹介します!

【第二部 午後2～4時半】
 公開事例検討会(グループワーク)
 事例提供: 参加者及び総合ケアセンター サンビレッジ
 具体的なやりとりを呈示していただき、
 参加者と一緒にその人らしさを生かしたケアを考えます
 注) 参加者には守秘義務を誓約いただきます

【第三部 午後4時半～午後5時半】
 交流会
 参加者が自由に交流します
 普段の活動や日頃の想いを語り合いましょ!!

参加費無料・事前申込制(定員40名)
 申し込み先: 京都文教大学臨床心理学部教育福祉心理学科
 yyoshimura@po.kbu.ac.jp (吉村夕里まで)



取り上げて参加者全員で検討するところから、定員も40名に制限し、利用者や利用者家族の合意の下に、参加者全員には守秘義務の誓約書の提出を求めたうえで開催するという形式とした。

プログラムの第一部の最初は【報告1】として、「認知症の施設ケアと地域ケア：総合ケアセンター サンビレッジの取組から」を報告いただいた。総合ケアセンター サンビレッジは、高齢者ケアは家族が担うことが当たり前とされていた1970年代から岐阜県の西濃尾地域を中心として、認知症高齢者ケアに先進的に取組んできており、本学出身の臨床心理士や精神保健福祉士が雇用された実績も持つ。当日は知的障害者と認知症高齢者が暮らす多世代型グループホームや、多職種協働の職員研修の取組や、在宅支援のためのアセスメントサービスの取組等、刺激的で新しい可能性を感じる取組の一端が紹介された。

次いで、【報告2】として、向島駅まちづくり協議会会長の福井義定氏から「向島地域の現状」を報告いただいた。同協議会は京都市のまちづくり助成を受けて「第一回向島ニュータウン駅前 健康福祉のまちづくりアンケート」を今年度実施されており、京都文教大学のニュータウン研究会も協力させていただいたという経緯がある。報告のなかでは、孤立する単身高齢者や認知症高齢者等の実態がアンケート結果に基づいて報告され、向島地域のまちづくりの重要性を喚起させる内容であった。

【報告3】は、京都文教大学総合社会学部の馬場雄司教授から「高齢者への取組」が報告された。そのなかでタイの高齢者の暮らしや、施設や在宅訪問での活動が紹介され、同教授の「ちんどん屋」とおした笑いの取組も紹介された。また、参加者と一緒に「ちんどん屋」のパフォーマンスが実際に行われ、会場は和やかな雰囲気に包まれた。

プログラムの第二部は「公開事例検討会」であり、最初にサンビレッジ新生苑の中辻由美氏から認知症高齢者の事例紹介が行われた。次いで、実際のケア現場のDVD映像が流されて、事例報告と実際の映像からストレングスアセスメントを参加者がグループワークとして行い、その結果を各グループがロールプレイ形式で発表し合った。発表では、次回からのケアに即活用できるアイデアが多く出され、事例提出者がそのなかからケア現場で実践できそうなアイデアを選択してロールリハーサルを行うという形で締めくくった。同事例検討会方式は総合ケアセンターサンビレッジで長年開催されてきた研究会の方式を踏襲したものであり、近年は介護職を中心として看護師、作業療法士、臨床心理士、精神保健福祉士、教育福祉心理学科の吉村と学生らが参加してきたものを「公開事例検討会」という形式で学生や一般住民にも公開して行う形としたものである。

第三部では交流会を行ったが、参加者からは「具体的なテーマで行われたので勉強になった」「日頃関わるのが少ない他機関の方や、学生や地域の方とグループを組むことによって様々な意見を聞くことができた」「これを機に医療と地域が連携していけるよう、自分自身の勤務に生かしていきたい」「私の施設にもそっくりな利用者様がいるので対応の選択肢が増えた」「日々、関わっている利用者への見方が変わっていきました」「多職種協働アプローチが求められているなか、こうした事例検討を増やしていくことは有効と思われる」との感想が得られた。

また、学生を交えた事例検討に対して、「施設以外で学生と交流し、研修や事例検討をすることで多面的な視点を学ぶことができたと思います。また、今日学んだことを施設に持ち帰り、伝達していこうと思います」「日頃、現場で職

員の目でしか見ていない部分を学生さんの目から見た場合の新鮮さがあって楽しかったです」
「学生の方との話し合いもとても刺激的でした。また、発表も堂々としていてまとまっていて聞きやすくて驚きました。私も頑張ります」「学生さんが積極的に行動、発表されていて頼もしく感じました」との感想があった。

学生からは「参加してみて学生同士の授業とは違い、実際に働いておられる職員さんと同じ立場でディスカッション出来たことはとても刺激になりました」「すごく良い時間を共有できて、普段の授業でやっていることを職員さんと同じように出来たということは毎回の授業が本当に意味のあることだったと実感しました」「事例についてのロールプレイが面白かった。自分が実演することでより強い体感が得られたと思う」との感想があった。

公開研究会や公開事例検討会は援助専門職や住民、学生らが参加するインタープロフェッショナル教育研修という意義があると考えられる。また、学生の意見が尊重されたうえで、援助専門職の現任者と対等な形で議論できる場を設けたことにより、学生たちが潜在的な能力を発揮したことは特質すべきことだと思われる。

公開事例検討会については守秘義務等のデリケートな問題が存在することも確かであるが、以上の問題をクリアしつつ、多職種協働の取組が重要視されている現場とのつながりを確保して、学生へのインタープロフェッショナル教育研修として今後も様々な領域で発展させて継続していきたい試みのひとつである。